

ツォンカパ伝における年次と四季の確定

福 田 洋 一
拉 毛 卓 瑪

一、研究の目標と方法

ツォンカパ・ロサンタクパ (tsong kha pa blo bzang grags pa ⁽¹⁾ 一三五七―一四一九) はチベット仏教の興隆に大きな貢献をした高僧であり、ゲルク派の開祖でもある。本稿は、そのツォンカパの毎年次、さらには季節ごとの事績を辿り、ツォンカパの活動の年時を確定ないしは推定することを目的とする。

ツォンカパにはケードウプジェ・ゲレーベルサン (mkhas grub rje dge legs dpal bzang, 一三五八―一四三八) とトクデ
ンパ・ジャンペルギヤツォ (rtogs lan pa jam dpal rgya mtsho, 一三五六―一四二八)⁽²⁾ という二人の直弟子の著した同時代の伝記が二つずつ、都合四つの資料が残されており、シヨル版ツォンカパ全集の第一巻目 (巻帙) に収録されている。それぞれは以下の通りである。

一、ケードウプジェ『偉大なる聖師ツォンカパの素晴らしく希有なる御事績・信仰入門』⁽³⁾ (*rje btsun bla ma tsong kha pa*

chen po'i ngo mtshar mad du byung ba'i rnam par thar pa dad pa'i 'jug ngogs) J, 71 fols, Toh. 5259.

二、トクデンパ『聖ツォンカバ大伝⁽⁴⁾の補遺：御事績の善説拾遺 (*nye bisun tsong kha pa'i man thar chen mo'i zur 'debs nam thar legs bshad kun dus*)』, 11 fols, Toh. 5260.

三、ケードゥプジェ『宝のごとく尊き師の大海のごとく広大な秘密の御事績(秘密の伝記) から少しばかりのことを述べた物語：宝の種 (*nye rin po che'i gsang ba'i man thar rgya mtsho lha bu las cha shas nyung ngu zhig yongs su brjod pa'i gtan rin po che'i snye ma*)』, 16 fols, Toh. 5261.

四、トクデンパ『師の秘中の秘なる御事績：素晴らしく希有なる物語 (*nye'i man thar shin tu gsang ba ngo mtshar mad du byung ba'i gtan*)』, 3 fols, Toh. 5263.⁽⁵⁾

トクデンパの二と四は、それぞれケードゥプジェの一と三の補遺という位置づけであるが、非常に簡略なものであるため、ツォンカパの活動の年時を考証するための情報はほとんど得られない⁽⁶⁾。

一から三までの伝記の成立順序は、『聖ツォンカバ伝』の解説で指摘されているように(二八〇―二八一)、ツォンカパの生前に、一のツォンカバ逝去以前の部分、三、二の順に成立し、ツォンカパが亡くなってから一の最後の部分⁽⁷⁾が書き足されたと推定される。四は同書では言及されていないが、この伝記のコロフォンに「卯年の八月八日に書いた」とあり、もしこれがツォンカバ生前であれば一四二一年となつて少し早すぎる。一方、二四年後の卯年(二四三五年)ではトクデンパは亡くつていたので、その間の一四二三年に書かれたものと推定され、上に挙げた四つの伝記の中では一番遅くに成立している。これはツォンカパ没後四年目に当たる。

ツォンカパの生涯の時間軸を決定するとき、以上の四書のうちケードゥプジェの『信仰入門』がもつとも基本的な伝記資料となる。まず、その大部分がツォンカバ生前に、筆頭弟子の一人であるケードゥプジェがツォンカバから直接話を聞いて書いているので同時代資料であり、その内容の信頼性が高い。さらに、『信仰入門』は、若い頃の修学

期を除いて、中央チベットに出てからの記録が編年体のように時間軸に沿って記述されている。ただし、編年体と言っても年時の記述があることは稀であり、ほとんどは「次の春に」や「夏と冬を過ごした」など、季節の移り変わりを記しているのみである。これら季節の記述は大抵、どこに行ったか、あるいはどこに滞在したかという場所の記録とセットになっており、さらには誰と会ったか、誰と一緒に行動したかも記されていることが多い。これらの情報も、ツォンカパの生涯の事績を辿る重要なメルクマールになる。

ツォンカパの著作には執筆年が記されていることは少ないが、著作場所は記されていることが多く、著作の内容と前後関係を考慮するならば、多くの著作について執筆年を確定するか、あるいは絞り込むことができる。中でも重要な著作に関しては、『信仰入門』の中に執筆時期が記録されているので、本研究によってこれらの著作の執筆年を確定あるいは推定することも出来る。

同様な試みはこれまでもチベット高僧によって行われてきた。特にチャハルゲシエ・ロサン・ツルティム (*cha har dge bshes blo bzang tshul khriims*, 一七四〇―一八一〇)⁽⁷⁾ が一七九〇年に執筆した『偉大なる一切智者ジエ・ツォンカパの御事績を分かりやすく述べたもの：一切の吉祥の源 (*rje thams cad mkhyen pa tsong bha pa chen po'i man thar go sla bar bryod pa bde legs kun gyi 'byung gnas*)』は、ツォンカパの年齢と年次を対応させて、一年ごとにツォンカパの事績を詳細に記述し、さらに年齢と年時とを対応させた年表 (*rje thams cad mkhyen pa tsong kha pa chen po'i nam thar gyi bs-dus don*) を付している。ロサン・ツルティムはコロフォンにおいて伝記を執筆するときの典拠として、ケードウプジエの『信仰入門』と『秘密の伝記』、トクデンパの『善説拾遺』の他に、ツォンカパ全集の各帙に収録されている『ロダクドゥプチェンとお会いになった様子とケードウプジエに齒 (聖遺骨) をお与えになったことについて』 (*lho brag grub chen dang mjal tshul / mkhas grub rje la tshems gnang skor*)⁽⁸⁾ と二つの事績についての短い神秘的な記述を挙げている。このうち、時間軸が明瞭に示されているのは『信仰入門』のみであり、ロサン・ツルティムの編年体

の記述も、『信仰入門』のみに基づいて推定されたものと見られる。内容の記述においても、『信仰入門』を「大伝」と呼んで頻繁に引用し、それを骨子として『秘密の伝記』など他の資料や、書簡、ツォンカパの自伝、讃歎偈や著作の帰敬偈、廻向偈などを引用して肉付けを行ったものである。

Kaschewsky (一九七二) は、同書のモンゴル語原典を参照しながらのドイツ語訳である。⁽¹⁰⁾ その序論には、チベットの歴史的背景、ツォンカパの伝記が列挙され、ロサン・ツルティムの略伝、モンゴル語原典およびチベット語訳の文献学的情報などが述べられている。訳注では、モンゴル語原文とチベット語訳の対応、地名や人名についての情報、主要なツォンカパの著作の対応箇所などが指摘されている。

従来、ツォンカパ伝についての研究では Kaschewsky (一九七二) が参照されてきたが、後に述べるようにロサン・ツルティムの伝記には、年時に関して『信仰入門』と部分的に齟齬があり、それに基づいた Kaschewsky の研究を見直す時期に来ている。

もう一つ、現在よく読まれているツォンカパ伝は、ギェルワンチュージェ・ロサン・ティンレー・ナムギェルの『偉大なるツォンカパの御事績・牟尼の教えを美しく飾る希有なる宝環 (song kha pa chen po'i rnam thar thub bzun mdzes pa'i rgyan gcig ngo mshar nor bu'i phreng ba)』である。⁽¹¹⁾ 執筆年は一八四三年から一八四五年まで、著者の生没年は不明である。⁽¹²⁾ 資料については、ケードウプジェの『信仰入門』と『秘密の伝記』を基礎にしながら、他の多くの伝記の名を挙げて、それらを全て一つに統合して伝記を書いたと述べている。しかし、本書も年時の記述に関しては、『信仰入門』の情報を越えるものではない。後に指摘するように、このロサン・ティンレー・ナムギェルの伝記にも、年時の確定に本稿との推定とのずれがある。

以上のように、ツォンカパの伝記における年時を確定するためには、まず『信仰入門』の記述からどれだけのことが確定・推定できるかを示す必要がある。結果としては多くの年時においてロサン・ツルティムの推定と一致するが、

本稿の作業の価値は、根本資料に立ち返って典拠を明確にしていることにある。以下本稿では、次のような手順で年時を推定していく。

一、『信仰入門』の中で年次が明示的に言及されている箇所を確認する。

二、年齢のみが言及されている箇所を確認する。生年と没年および一での絶対的年次が分かっているので、年齢の記述から推定できる年次も一と同様に確実な年次だと言える。

三、一と二で判明している年次を元に『信仰入門』における四季の推移の記述から年時および年齢を計算していく。特定の年に確定できず、複数年の期間を示さなければならない場合には、そのことを明示する。

四、年時だけではなく、『信仰入門』に記録されているツォンカバの移動先および関連する人物名も併記する。ツォンカバの著作についても、『信仰入門』に言及されるものは全て挙げる（言及されていないものについては挙げない）。

以上の年時確定の作業の過程で、上記ロサン・ツルティムとロサン・ティンレー・ナムギェルの伝記との齟齬がある場合には、推定の根拠を示して考察を加えた。

二、『信仰入門』に明示されている年次と年齢

『信仰入門』において、十二支による年号が言及されているのは以下の一二箇所である。これらのうち、年次と年齢の両方が言及されているのは、【三】申年（一三九二）の三六歳と【七】卯年（二四一一）の五五歳の二箇所である。¹⁴『信仰入門』には、ツォンカバの亡くなった年齢は記述されていないが、【三】と【七】の年次と年齢から計算すると、ツォンカバが亡くなった【一二】の一四一九年には、ツォンカバは六三歳であったことが分かる。同様の計算に

よって、ツオンカパの生まれた年は酉年一三五七年であることが確定できる。その他の年次に対応する年齢も計算できる。以下の表の↓の後に記す。⇨は年齢が『信仰入門』に明示されていることを示す。

- 【一】 丑年 (一三七三) ↓ 一七歳 (9b6, 和訳・四一)⁽¹⁵⁾
- 【二】 午年 (一三九〇) ↓ 三四歳 (22b6, 和訳・六六)
- 【三】 申年 (一三九二) ⇨ 三六歳 (27b6, 和訳・八三)
- 【四】 子年 (一四〇八) ↓ 五二歳 (44b2, 和訳・一〇六)
- 【五】 丑年 (一四〇九) ↓ 五三歳 (44b4, 和訳・一〇六)
- 【六】 寅年 (一四一〇) ↓ 五四歳 (50a3, 和訳・一一五)
- 【七】 卯年 (一四一一) ⇨ 五五歳 (50a6, 和訳・一一六)
- 【八】 辰年 (一四一二) ↓ 五六歳 (50b3, 和訳・一一六)
- 【九】 未年 (一四一五) ↓ 五九歳 (52a3, 和訳・一一九)
- 【一〇】 酉年 (一四一七) ↓ 六一歳 (52a5, 和訳・一一九)
- 【一一】 戌年 (一四一八) ↓ 六二歳 (54a1, 和訳・一二一)
- 【一二】 亥年 (一四一九) ↓ 六三歳 (54a4, 和訳・一二六)

また『信仰入門』で年齢のみが言及されている箇所は次の四箇所である。これらについても、年次を計算し確定することができる。

- (一) 三歳→一三五九年 (523-3, 和訳・二九)
- (二) 七歳→一三六三年 (706, 和訳・二九)
- (三) 一六歳→一三七二年 (805, 和訳・三八)
- (四) 一九歳→一三七五年 (1004, 和訳・四三)

これらを時間軸上の定点として、次に『信仰入門』の記述から計算できる年時を確定・推定していこう。

三、『信仰入門』の四季節の記述から推定される年次

「前節に挙げた年次(あるいは年齢)以外に、『信仰入門』において明確な年次の記述はないが、ケードウプジェは、ツォンカバが場所を移動するたびに、細かくその季節(季節の学期あるいは夏安居なども含む)について言及している。第二節で確定できた年次の年について、その季節の記述を頼りに年次を推定していくことが可能である。ただし、中には正確に計算できず、確定された年次の間で辻褄が合うように推測しなければならぬ場合もある。また二年間あるいは三年間同じところに滞在している場合には、その期間以上の正確な年次を指摘することはできない。

『信仰入門』の中で、季節の移り変わりが連続して書かれるようになるのは、二〇歳以降である。それまでの活動の年時は、大まかなことしか分らない。ツォンカバは七歳(一三六三年)までは自分の家で過ごし、七歳から一六歳(一三七二年)まではチュージェ・トンドウプ・リンチェン(chos rje don grub rin chen)⁽¹⁶⁾のもとで勉学した。

そして、一六歳(一三七二年)のとき、中央チベットのスアン(gsang)に勉学に行く事になり、翌年(丑年、一三七三年)ツォンカバ一七歳の秋にダイゲン寺(chi gang)に到着した。そこで、ダイゲン・カギユ派第一五代座主のチェンガ・リンポチエ・チューキ・ギェルポ(spyan snga rin po che chos kyi rgyal po, 一三三五～一四〇七)に大乘の発心の

儀軌や五支マホームドラーなどの法を聴聞した。

次にデワチエン (bde ba can) に行つて、そこで一七歳から一九歳までの二年間般若思想⁽¹⁷⁾を学び、その内容に通達した (865-10b4 和訳・四二〜四三)。

一九歳 (一二七五年) のとき、サンブ (gsang phu) 、デワチエンを廻り、さらにシャル寺 (shwa se) において僧院長ダツエバ・リンチエン・ナムギェル (sgra tshad pa rin chen nam rgyal, 一三二八〜一三八八) にマイトリーパ流のチャクラサンヴァアラ一三尊の灌頂を聴聞した。次に、ナルタン寺 (nar thang) 、サキヤ寺 (sa skya) 、ササン寺 (sa bzang) 、ダルサンデン寺 (dar bzang ldan) 、ガムリン寺 (ngam ring) 、ガロン寺 (ga' rong chos sde) 、ジモナン寺 (jo mo snang) 、ポトン寺 (po dong) 、チボレー (spyi bo lhas) 、大僧院エ (e) 、ナルタン寺、ネーニン寺 (ngas rnying) などを廻つて有名な高僧に各種の論書を聴聞し、また問答を行つた (grwa skor)。(10b4-11b2, 和訳・四三〜四五)

『信仰入門』に季節の移り変わりが連続して書かれるようになるのは、ネーニン寺に短期滞在したのち夏学期 (dbyar chos) にツェチエン寺 (tse chen) を訪れたときからである。年次ないし年齢の記載はないが、一三七五年一九歳の後にサンブ寺から始まつて一五の僧院を訪問して、夏学期にツェチエンで過す⁽¹⁸⁾と記述しているので、翌一三七六年二〇歳のこととするのが妥当であろう。次に年次が示されるのは一三九〇年三四歳のときなので、それまでの間は四季の言及を基に年次を推測していく必要がある。

〈一〉二〇歳 (一三七六年)⁽¹⁸⁾

夏学期はツェチエン寺に行き、そこで智者ニヤオン・クンガペル (nyā dbon kun dga' dpal, 一二八五〜一三七九) から般若思想を聴聞した。またニヤオンの弟子の聖レンダワ (red mda' ba gzhon nu blo gros, 一三四九〜一四二二)⁽¹⁹⁾を紹介された。その夏にサキヤからツェチエンに来ていたレンダワに『阿毘達磨俱舍論』とその自注の懇切丁寧な指導を受け

た。(11b2-12a3, 和訳・四五～四六)

夏学期と秋学期の合間に、レンダワとツォンカパ師弟はニヤントゥ (nyang stod) のサムリン寺 (bsam gling) に旅し、レンダワから『入中論』を聴聞した。(13b5-6, 和訳・四八)

秋の終わりにニヤントゥを発ち、キシユ (skya stod) のポタラ (po ta la) に行き、アビダルマ思想の権威である大総院長チャンチュプツエモ (byang chub rse mo) と法縁を結んだ。(13b6-14a4, 和訳・四八～四九)

冬は、デワチエンで過した。(14a4, 和訳・四九)

〈二〉二二歳 (一三七七年)⁽²⁰⁾

その後、キョルモルン寺 (skvor mo lung) に行き、律蔵に精通した大持戒者である僧院長カシパ・ロセル (bka' bzhi pa blo gsal) に『根本律経 (tul ba mdo rtsa ba)』の注釈全部を聴聞した。それを完全に理解して暗記した。(14a4-15a2,

和訳・四九～五〇)

冬はネーニン寺に滞在した。求道者や随行者の懇請により、それまで熟読したことのない『阿毘達磨集論』を、読んだ端から理解して素晴らしい講義を行った。(15a2-6, 和訳・五〇～五一)

〈三〉二二歳 (一三七八年)

春、ナルタン寺を経由してサキヤ寺に行き、そこで道果説を聴聞していたレンダワに再会し、サキヤに一ヶ月(二二歳の冬まで)滞在した。レンダワに『阿毘達磨集論』の懇切丁寧な指導を受けた。さらに、レンダワに主として『プラマーナ・ヴァールティカ』を聴聞し、『入中論』などの解説と、『根本律経』の音読儀礼 (lung) など、多くの経・論の解説と音読を授かった。ドルジェリンチェン (do rje rin chen pa) にサキヤ派流の『二分別』 (brtag gnyis,

『ハーヴァジュラ・タントラ』の注釈)を聴聞した。(15a6-b4 和訳・五一)

〈四〉二三歳 (一三七九年)

レンダワとツォンカパ師弟は、春学期の前に、サキヤからラトウ (la stod) のダムリン (dam ring) に行き、そこに春学期と夏学期の間、滞在した。レンダワは『阿毘達磨集論』の大注釈 (*mngon pa kun las btsu kyi Tika chen mo*) を書き、ツォンカパは書き終わったところから理解していった。また『プラマーナ・ヴァールティカ』について詳しく聴聞した。(15b4-6 和訳・五一～五二)

秋学期、メルド・ラルン (*mal gro lha lung*) に滞在し、そのラマ・ソナムタクパ (*bsod nams grags pa*) から聖典の音読儀礼 (*chos lung*) を授かり、瞑想修行をした。また、『プラマーナ・ヴァールティカ』の注釈書『論理の蔵 (*ngas mdzod*)』⁽²²⁾ を読み、特にその第二章「量成就章」の道の設定を説く箇所を熟読して、ダルマキールティの学説と論理学に対して無量の信心が生じた。(15b6-17b3 和訳・五二～五四)

冬学期は、デワチェン寺に滞在した。(17b3 和訳・五四)

〈五〉二四歳 (一三八〇年)

春学期の前半は、問答のための文献の下調べをしてから、ツァンのナルタン寺に行き、翻訳師トンドゥブ・サンポ (*don grub bzang po*) が論理学の複注 (*shad nai Tikka*) を著しているので何としても一度聴聞しなさいとお言葉を「レンダワから?」賜り、「それを」聴聞した。(17b3-4 和訳・五四)

夏学期は、ナルタン寺で、『プラマーナ・ヴァールティカ』、大乘・小乗の阿毘達磨(『阿毘達磨俱舍論』と『大乘阿毘達磨集論』)、『根本(律)経』についての問答を行った。(17b5 和訳・五五)

秋学期から翌年（一三八一年、二五歳）の春学期は、まずエ（㊦）僧院に行き、翻訳師ナムカ・サンポ（*nam mkha bzang pa*）に『詩鏡注（*shyan ngag me long gi bshad pa*）』などを聴聞した。根本ラマのレンダワからは、中観、論理学、阿毘達磨などを聴聞し、般若と律は、それぞれ適切な師に聴聞するなら縁起がいいと、それぞれの師にお願いして聴聞した。中観六論書については、『入中論』の解説以外は誰にも聴聞できなかった。中観六論書の音読儀礼は、ナルタン寺の僧院長クンガ・ギエルツェン（*kun dga' rgyal mshan*）から授かった。デワチエン寺のジャムペル・リンチェン（*jam dpal rin chen*）からも音読儀礼を授かった。当時、レンダワとツォンカバ師弟に対して中観六論書の解説をしてくれる師はなく、その音読儀礼を授けてくれる師も見出し難い状況だったのである。それから、師弟はサキヤ寺に行き、ツォンカバは難解典籍（*dka' chen*）⁽²⁴⁾ についての問答を行った。（17b5-18a6、和訳・五五〜五六）

〈六〉二五歳（一三八一年）

夏学期は、ウに行つて、グンタン寺の十日祭、サンブ寺、ツェタン寺（*rtses thang dgon*）などの大僧院を訪れ、すでに終えていた般若思想以外の四大難解典籍（*dka' chen lhag ma bzhi*）の問答を行った（18a6-b4、和訳・五六）。

ツェタンでの議論を終えた後、ヤルルン・ナムギェル（*yar lung nam rgyal*）寺でカシミール・パンデイタ大沙門シヤークヤシユリーバドラ（*Sakyasribhadra*、一二七〜一二二五）⁽²⁵⁾ の律の伝統を引く僧院長カシパ・ツルリンパ（*dka' bzhi pa tshul rin pa*）が親教師を務め、チェジンパの僧院長（*tshogs pa bye rdzang pai mkhan po*）の持戒僧シエルゴンパ長老（*sher mgon pa*）が掲磨師をし、チェジンパの読誦師の律僧ソナム・ドルジエ（*bsod nams rdo rje*）⁽²⁶⁾ が秘密師をし、ツォンカバに具足戒を授けた。（19b1-4、和訳・五九〜六〇）

〈七〉二五歳（一三八一年）～三〇歳（一三八六年）

それから、⁽²⁷⁾デイゲン・カギユ派の本山であるテル（*Ter*）⁽²⁸⁾に行き、チェンガ・リンポチエ・タクパチヤンチュポ（*spyan lnga rin po che grags pa byang chub*）⁽²⁹⁾に、道果説の完全な口訣、ナーローの六法、「カギユ派の」パクモドウパとジクテングンポの全集などを聴聞した。（1964-2022 和訳・六〇）

学期の合間にオンのケル仏殿（*on gyi lha khang ke ru*）に行き、ツアコホンポ・ガワン・タクバ（*sha kho dgon po ngag dbang grags pa*）⁽³⁰⁾などの多くの三蔵僧に対して、般若思想、論理学、中観などを講義した。（2022 和訳・六〇）

それから、キシユ（*skyid shod*）のツエルに滞在し、チベット語に訳された全ての経典と論書を熟読した。全ての経典の内容を分析するための様々な方法について初めて思いを巡らせた。『現観莊嚴論』とその注釈書に対する大部の解説書（『善説金蔓』⁽³¹⁾）の執筆に着手した。（2022-3 和訳・六一）

冬学期はデワチェンに滞在し、多くの三蔵（経・律・論）を講義した。（2026 和訳・六一）

〈八〉三一歳（一三八七年）

春学期に、ウトウ（*dbu stod*）のチャユル（*bya yul*）に行き、善知識七〇人ほどに般若思想、論理学、『人中論』、『阿毘達磨集論』などを講義した。再びツエルに行き、般若思想の解説書（『善説金蔓』）の残りを著し、結びは同年五月にデワチェンにおいて完成させた。⁽³²⁾キヨルモルン寺において、ツエル派の師トクデン・イシエー・ギェルツェン（*rogs idan ye shes rgyal nshan*）⁽³³⁾にお願いして『時輪タントラ』の大注釈書『無垢光』（*tri med pa'i 'od*）の詳細な解説を聴聞した。また同寺において、多数の三蔵僧に対して大小多くの論書の講義を行った。（2026-21a3 和訳・六一）

次の夏学期⁽³³⁾、ふたたびデワチェン寺に集まった頭脳明晰な多数の人たちに、多数の三蔵の法を講義した。（21a3-4

冬は、トゥルン (stod lung) のツォメー (missho smad) とガンカル (ngang dkar) で『時輪タントラ』に基づく心の訓練 (things sbyongs) をした。また頭脳明晰な多数の善知識に多くの講義を行った。(21a4r, 和訳・六三)

〈九〉三二歳 (一三八八年)

春、ゴンカル (gong dkar) 寺のゴムバ・チューギェル (sgom pa chos rgyal) の招待を受け、「ゴンカルの」五明仏殿 (rigs lnga lha khang) に滞在した。そこで、七〇人以上の三蔵僧に対して、般若思想、論理学、大乘・小乗の阿毘達磨、『根本律経』、『入中論』などを講義した。(21a6-b1, 和訳・六三)

冬、ムンカル (smon mkhar) のタシドン (bkra shis gdong) に滞在した。多くのテキストを同時に説くために、その月(二〇月)一〇日から三〇日まで準備をし、翌月(二一月)の三日までにマルパ (mar pa lo tsa'i chos kyi blo gros, 一〇〇一〜一〇九七)、『ミラレーバ (mi la ras pa bzhad pai rdo rje, 一〇四〇〜一〇三三)』などの小品をいくつか説いた。(二〇月)五日からは、インドの典籍を冒頭から読み始め、毎日一五コマの講義を行った。そして、『プラマーナ・ヴァールティカ』、『現観莊嚴論 (bhar phyin)』、上下の阿毘達磨、『根本律経』、『弥勒の後ろ四法 (byams chos phyi ma bzhi)』、『中観五論書』、『入中論』、『四百論』、『入菩薩行論』の一七の論書を講義した。講義の間に、ツォンカパはヴァジュラヴァイラヴァの自加持や、「生起・究竟の」二次第の瞑想修行を行った。(21b4+22b2, 和訳・六四〜六五)

〈一〇〉三三歳 (一三八九年)

夏は、ヤルルンのオカルタク (o kar brag) に滞在し、チャクラサンヴァラ尊の真言念誦と瞑想修行 (bsnyen sgrub) と四座瑜伽 (thun bzhi'i mal 'byor) と自加持の行を何度も行い、さらにニグマの六法 (ne gu chos drug) の一連の観想でお心にヴィジョンが現れ、トゥンモの調息 (lung sdyor) も毎日八〇〇回ほど行った。(22b2-4, 和訳・六五)

秋はキシユに行き、ウから到着したレンダワとともにポタラに滞在し、勝法についての多くの議論を行った。その後、レンダワはツアンに向かった。(2294、和訳・六六)

その冬、キョルモルンの岩山で多くの学僧に『時輪タントラ』、般若思想、論理学、阿毘達磨などの講義を行った。(2296、和訳・六六)

〈一〉三四歳(一三九〇年)

午年(一三九〇年)の春、主要な密教経典の解釈と灌頂、作法、口伝などの全てを徹底的に究明するため、また、師レンダワと議論する必要があったため、ツアンに行き、ロンのヌプチュールン(rong gi snubs chos lung)に滞在した。その集会堂長の尊者タクパ・シェーニエン(grags pa bshes bsnyen)から様々な経典の教え(bka' lung)を聴聞した。このとき、ラマ・ウマバ(bla ma dbu ma pa)と初めて会った。(2296-2304、和訳・六六-六七)

それから「夏」⁽³⁸⁾タクツァン城(stag tshang rdzong kha)に行った。そこで翻訳師の法王キヤプチョク・ペルサン(chos rje skyabs mchog dpal bzang po)が主催者となり、翻訳師タクパ・ギエルツェン(grags pa rgyal mtshan)、レンダワ、翻訳師トンドゥブ・サンポ、ツォンカバと、多数の善知識、三蔵僧、当地の僧衆が会して大法話会が行われた。タクパ・ギエルツェンは般若思想、法王キヤプチョク・ペルサンは『二分別』を講義した。レンダワは自作の『プラマーナ・ヴァールティカ』の注釈書をつォンカバに講義し、師第二人は難解な箇所の意味を確定すべく詳しい議論を行った。(2304-2404、和訳・六七-七八)

「夏学期と秋」学期の合間に、レンダワとツォンカバ師第二人はバウバニエル('ba'u'ba'nyen)に行き、そこでツォンカバはレンダワから『秘密集会タントラ』の根本タントラの講義を一通り聴聞した。この時期から密教の学習が本格化した。その後、レンダワはサキヤに帰った。ツォンカバはロンのチュールンに行つて、ラマ・ウマバと多くの

法談をし、「ラマ・ウマパを介して」聖文殊の一連の法をたくさん聴聞した。そこで実践修行に入る決意をした。

(244+254, 和訳・六八～七〇)

秋は、ロンのリンルン窟 (ring lung dhug) に滞在した。秋の終わりに、ニヤントウ (nyang stod) のゴンスムデチェン (gong gsum sde chen) 寺でチューキペルワ (chos kyi dpal ba) にお願ひして『時輪タントラ』の大注釈書の解説を聴聞した。(254+25b4, 和訳・七〇～七一)

〈二二〉三五歳 (一三九一年)

〔三四歳の〕秋の終わりから〔翌年三五歳の〕春学期の初めにかけて、ゾクリン (rdzogs ring) で、チューキペルワに、タントラの注釈の講義や実践の手引き、六支ヨーガの観想の手引きなどを全て聴聞した。それから、ニヤン溪谷の上流と下流の境 (nyang stod smad kyi ntshams) にあるティツァカン (khris tswa khang) に、プトンの孫弟子に当たるヨーガ師グンサン (ngon bzang) を招いて、金剛界、吉祥最勝、金剛頂経などヨーガタントラの大マンダラ作法全てを学んだ。その学習をしているある晩、〔翌年会うことになる〕³⁹キェンポレーバの夢を見た。(254+26a5, 和訳・七一～七二)

春学期の終わりから秋学期の初めまで、ゴンスムデチェン寺でチューキペルワに、様々な灌頂、音読儀礼、テキストの解説や口伝、実践の指導など、密教の法をたくさん聴聞した。(26a5, 和訳・七二～七三)

〈二三〉申年三六歳 (一三九二年)

ある夜、ふたたびキェンポレーバの夢を見たのち、〔三五歳の〕秋学期の終わりから、〔翌年三六歳の〕夏学期までシヤル寺 (zhwa lu) に滞在し、聖キェンポレーバ (rje bisun dan pa khyung po lhas pa) からヨーガタントラの大マン

ダラなど下位の三タントラ（所作タントラ、行タントラ、ヨーガタントラ）で、当時チベットに清浄な灌頂の伝統の続いている全ての教説を聴聞した。また、チャクラサンヴァラ尊を始めとした無上ヨーガタントラの教説なども無量に聴聞した。こうしてプトンからキュンポレーバに伝わった法が全てツォンカバに伝わったのである。（2694-2711、和訳・七三〜七四）

パナム (pa nam) のパクパ山 (bhag pa ri) に来ていたチューキベルワに、『時輪タントラ』と『秘密集会タントラ』とに関連する多数の注釈書・論書を聴聞した。チューキベルワがゴンスムデチェン寺に戻ったあと、シャル寺のヨーガ師ギェルツェン・タクバ (rgyal mtshan grags pa) を招いて、様々なヨーガタントラの経典・注釈書・解説を無量に聴聞した。（2753-6、和訳・七五）

申年（一三九二年）の秋にラマ・ウマパとともにウのガワドン (dga' ba gdong) に滞在し、ラマ・ウマパを介して聖文殊に中観思想や顕教、密教の区別などの様々な質疑を行った。その間にツォンカバは、ラマ・ウマパを紹介することなく直接聖文殊と対話できるようになった。（2756-31b3、和訳・七五〜八一）

その秋のうちにドカム (mdo khams) に行くラマ・ウマパをラサまで見送りに出て、トゥルナン寺の門堂の上の仏殿でツォンカバはラマ・ウマパに阿闍仏を本尊とする『秘密集会タントラ』の四灌頂を全て授けた（これがラマ・ウマパと会った最後である）。その後、秋学期の終わりに、ツォンカバはキョルモルンに行き、多くの法を講義した。（3241-2、和訳・八三）

三六歳申年（一三九二年）の冬の一月に、キョルモルンから八人の弟子と共にウルカ (o' ka) に船で行って遁世修行に入った。（3242-5、和訳・八三〜八四）

〈一四〉三七歳（一三九三年）

〔二六歳の〕冬から〔三七歳の〕春にかけて、ウルカのチュールン（*chos lung*）で弟子たちと遁世修行を続けた。特に福德の資糧を積み罪業を浄化する修行に励んだ。（32a3-33a3 和訳・八四）

夏は、ジンチ（*rdzings phyi*）の弥勒像を参拝し、供養した。（33a3 和訳・八五）

冬、タクポメンルン（*dwags po sman lung*）のギャソクブ（*gya sog phu*）に行った。その時からヴァジュラヴァイラヴァ十三尊の自加持（*bdag jng*）の行を途切れることなく行うようになった。（33a3-4 和訳・八五）

〈一五〉三八歳（一三九四年）⁽⁴⁰⁾

春、ウルカに行つて、祝福が未曾有に大きいことで有名なジンチの弥勒像が、墓場で倒れたまま放置されていたのを復興し、仏殿を修復して、落慶法要を行った。（33a4-1 和訳・八五～八七）

〔夏、⁽⁴¹⁾〕ロダクのナムカ・ギェルツェンに招かれてタオ寺（*bra bo dgon pa*）に行き七ヶ月滞在した。ツォンカパはロダクの諸僧に『大乘集菩薩学論』などの講義を行った。尊者ナムカ・ギェルツェンに五大陀羅尼の灌頂など、灌頂や随許を授けた。ナムカ・ギェルツェンからは菩提道次第の手引きを聴聞した。（33a4-4 和訳・八七）

ジンチの弥勒像に多くの供物を捧げ、顔に金を塗り重ね、『讚歌、梵天の冠（*bsirol pa tsikangs pa'i cod pan*、Tolh 525-59）を捧げて、インドのシンギリに行こうとしたが、本尊である聖文殊がヴィジヨンに現れ、インド行きを制止したので、断念してニエル地方に行った。（33a4-35a1 和訳・八七～八八）

〈一六〉三九歳（一三九五年）

〔ジンチでインド行きを断念したのち⁽⁴²⁾〕ニエルのロロ（*gnvel lo ro*）に着き、トウタク（*stod stag*）に五ヶ月程滞在

した。そこにデインレーパ (Dzin las pa)⁽⁴³⁾ が著した『教説次第大論 (bslan rim chen mo)』が将来されていたのをお迎えし、供養を捧げて詳しく読むことよって「自らの道次第思想に」大きな確信を得た。そして教説次第について初めて講義をした。再び遁世修行に入り、仏の説いた教説一切およびその実践の仕方について誤りのない確信を得た。さらに、全ての所化それぞれの能力に応じて導くことができる道次第について確信が生じた。(35a1-36a2, 和訳・八八〜九〇)

それから、下ニエルのセルジェガン (gsal rje gangs) のヤルデン寺 (yar 'dren dgon pa) で一夏を過した⁽⁴⁴⁾。 (36a2-3, 和訳・九〇)

それから、師弟三十人でツァリのマチェン (tsa ri ma chen) に行き数日滞在した。チャクラサンヴァラ尊の自加持などの行を行い、未曾有の験がたくさん生じた。それから、再びニエル地方に行き、下ニエル地方のセンゲゾン (seng ge rdzong) に滞在した。⁽⁴⁵⁾セルチェブムパ (gser phyve 'bun pa) 寺で、律の講義をたくさんした。(36a2-b4, 和訳・九〇〜九一)

〈一七〉四〇歳 (一三九六年) ～四一歳 (一三九七年)

春に、ニエルのガンチュン (sgang chung) に滞在し、様々な法を講義した。(36b1-b6, 和訳・九二)

夏は、上ニエルのラプドン寺 (rab grong) に滞在した。ダルマリンチェン (dar ma rin chen) と初めて会った。ラプドンの僧院長が施主となり、何日間もの法話会が開かれた。(36b6-37a6, 和訳・九二〜九三)

〔四〇歳の秋に〕ニエルを出発して再びウルカに行った。オデグンギェル聖山の麓下 (o de gung rgyal lha zhol) にあるラデイン (lha sdings) に〔四〇歳の秋、冬、四一歳の春、夏の〕一年間滞在し、講義を行った。この聖地でラマ・ウマパと聖文殊を一体のものとみなして強く祈願をして論理による考察を行ったところ、素晴らしい加持の験 (byin

gyis brlabs pai mshan ma khyad par can) が顕れた。その中で、ブツダパーリタ本人からサンスクリット語の『中論』の原典を授かるというヴィジョンが顕れ、中観思想の最終的な確信を得た。⁽⁴⁶⁾その後『縁起譜』⁽⁴⁷⁾を著した。⁽⁴⁸⁾(37b1-38b2. 和訳・九二～九三)

〔四一歳の〕秋にウルカに行った。(38b2. 和訳・九五)

〈一八〉四二歳(一三九八年)

〔四一歳の〕冬から〔四二歳の〕春にかけてウルカのガルパク (ngar brag) に滞在し、ウルカの僧たちに講義をした。(38b2. 和訳・九五)

夏は、エ地方のテウラン (ei steu rang) に滞在した。(38b3. 和訳・九五)

冬は、ウルカのタクドン (brag stong) に滞在した。ジンチの弥勒像を拝観し、神変会を祝って、十五日間、盛大に供養を捧げ一切衆生の平安を祈願した。(38b3. 和訳・九五)

〈一九〉四三歳(一三九九年)

春、カプチュバ (dka' bu pa) 御前〔ダルマリンチェン〕を始めとする二百人以上の三蔵僧に多くの法を講義した。(38b5. 和訳・九五)

夏は、ニヤンポのダンド寺 (nyang po ndangs ndoi dgon pa) に滞在し、その地方の僧たちに多くの法を講義した。(38b5-6. 和訳・九五)

秋は、長官ナムカ・サンポの招請を受け、キシユに行き、ポタラに滞在した。サンブ寺、デワチェン寺、ゲンル寺の三寺 (gang bde gung gsum) 、ガワトン寺、キョルモルン寺、スルブ寺の三寺 (dga' skyor zui gsum) の人々を始めと

する百人以上の三蔵僧に『中観光明』、律、道次第など多くの法を講義した。(39b6-39a3 和訳・九五～九六)

〈110〉四四歳（1400年）

春、ガワドンに行った。大乘者が密教修行に進むための心構えについて考えたことを基に、『瑜伽師地論』の「菩薩地」における「菩薩戒」の章（P. No. 5538-110）や『師に関する五十頌』⁵（*bla ma lnga bcu pa*, P. No. 1403）、『三昧耶戒における』十四墮罪（*rtsa lung bcu bzhi pa*, P. No. 3311, 3313）などを講義した。その講義の終わり頃にレンダワがガリから到着した（39a3-b3 和訳・九六～九七）

夏安居はタクツァンで行ってから、ウのガワドンに行った。そこで師レンダワを迎え、師弟二人で多くの法を講義した。その夏⁴⁹、師弟二人はカダム派の源泉となったラデン寺（*rwa sgreng*）に、多くの三蔵僧を伴って行った。（39b3-5 和訳・九七）

冬は、ラデン寺に滞在した。レンダワは『六十頌如理論』と『秘密集会』の五次第などを講義し、ツォンカバは『大乘莊嚴經論』、『中辺分別論』、『大乘集菩薩學論』、『瑜伽師地論』の「声聞地」などの所説を総合し、奢摩他（*zhi gnas*）の解説一切を講義し、実践させた。師弟二人は、顕教と密教の修道の重要な点について多くの議論をした。（39b6-40a3 和訳・九七～九八）

〈111〉四五歳（1401年）

翻訳師の法王キャブチョク・ペルサンとディゲン法王チェンガ・リンポチェの招請により、春の初めにディゲンに行って、多くの法を講義した。ディゲン法王からは、ナーローの六法とマハームドラーの俱生の瑜伽（*lhan cig skyes sbyor*）などを聴聞した。（40a3-4 和訳・九八）

法王キャプチョク・ペルサンとレンダワとツォンカパの三人がナムツェデン (gnam rtsed ldang) 寺に集まり、六百人を超える僧とともに夏安居をした。『根本律経』『律分別』などに説かれる個々の規定を忠実に守って、清浄な作法を行う伝統を復興させた。夏安居の終わりにレンダワはツァンに戻った。⁽⁵⁰⁾ (40a41a 和訳・九八〜九九)

〔その後〕二人の法王 (キャプチョク・ペルサンとツォンカパ) は、付き従う僧たちとともにラデン寺に行き、タクセング (brug sang+ge) の麓に隠棲所を建てた。法王キャプチョク・ペルサンを始めとして多くの人の強い勧めがあり、ツォンカパはそこで『菩提道次第大論』⁽⁵¹⁾ を著した。⁽⁵²⁾ また、『瑜伽師地論』の「菩薩地」の「菩薩戒」の章 (『の注釈書』⁽⁵³⁾ 『根本堕罪 (risa lung)』⁽⁵⁴⁾ 『の注釈書』⁽⁵⁵⁾ 『師に関する五十頌 (Dra ma lnga bcu pa)』⁽⁵⁵⁾ の注釈書を著した。法王キャプチョク・ペルサンは『菩提道次第大論』の経冊を受け取り、それを持ってツァンに出立した。(41a47) 和訳・九九〜一〇〇)

〈二二〉四六歳 (一四〇二年)

〔四五歳、四六歳の〕夏・冬二〔回の〕間、その同じ「ラデン寺」に滞在し、道次第など多くの法を講義した。
(41b1-2 和訳・一〇一)

〈二三〉四七歳 (一四〇三年) ～四九歳 (一四〇五年)

〔四七歳の正月に〕大神変月の大祭において、盛大に供養と祈願をした。ラデンを発って、レーブ新寺 (lhas phu dgon gsar) に向かった。(41b2-3 和訳・一〇一)

夏、タクバ・ギェルツェン王 (mi'i dbang po grags pa rgyal mshan pa, 一三七四〜一四三三、パクモドゥバ政権の五代摂政) に招かれ、オン溪谷のデチェンテン寺 (on sde chen steng) に行き、数百人の三蔵僧とともに夏安居に入った。そこで、菩提道次第の手引き、中観思想と論理学の難解な箇所を解決する〔講義など〕多くの法を説いた。(42a2-3 和

〔秋に、〕オデゲンギェルの山麓にあるオルカルのチャンパリン (byams pa gling) に行き、〔四九歳一四〇五年の秋まで〕二年間そこに滞在した。そこで道次第と生起次第・究竟次第の法を説いた。阿闍梨ナーガボーディ (Nagabodhi, klu byang) 著の『五次第の注釈』の複注、⁽⁵⁶⁾『真言道次第大論』⁽⁵⁷⁾、『ヴァジュラヴァイラ成就法』⁽⁵⁸⁾、大部の護摩儀軌などを著した。(42a3-42b6, 和訳・一〇二一―一〇三三)

〔四九歳一四〇五年の〕冬は、チャンチュブルン寺 (byang chub lung) に滞在し、顕密の三歳僧数百人に、秘密真言の道次第を講義した。(42b6, 和訳・一〇三三)

〔二四〕五〇歳(一四〇六年)〜五二歳(一四〇八年)

〔五〇歳一四〇六年の〕夏安居は、セラチューディン (se rwa chos sdings⁽⁶⁰⁾) で行われた(セラチューディンには二年滞⁽⁶⁰⁾在する)。「秘密集会タントラ」の五次第と母タントラの究竟次第の講義を少し行なった。多くの人にお願ひされて『中論』の詳説を著そうと考へ、『中論』の論理を詳しく検討したが、難解な箇所があったので、ラマ(・ウマバ)と聖文殊を一体のものと観想して祈願を繰り返したところ、般若経の二十空のウィジョンが何度も現れ、『中論』の論理の難解な箇所全てについて疑問が氷解した。それからすぐに『了義未了義の区別』⁽⁶¹⁾と『中論』の注釈書である『正理大海』⁽⁶²⁾を著した。(43a1-5, 和訳・一〇三三)

〔五二歳一四〇八年の六月(夏)⁽⁶⁴⁾、〕明の永楽帝からの招聘を辞退し、皇帝に返信を書いた。(43b1-5, 和訳・一〇三四) それから、セラチューディンにおいて『中論』、了義未了義の区別、『四百論』、密教の道次第、『三昧耶戒における根本墮罪』、『師に関する五十頌』などを講義し、菩提道次第の指導を行なった。サンブ寺とデワチエン寺の比丘、ガーワドン、キヨルモルン、スルプ三寺の座主、タンサク寺 (thang sag pa) の元座主など約六百人の僧が集まった。⁽⁶⁵⁾

(4323-4. 和訳・一〇四)

こうして「五〇歳一四〇六年夏から五二歳一四〇八年夏までの」二年間セラチュエーディンに滞在した。夏安居の終わりに、王タクパ・ギェルツェンに招かれて、キメー (skyyid smad) のドゥムブルン (grun bu lung) に行った。

(4364-6. 和訳・一〇五)

「五二歳一四〇八年の」冬は、キメーのドゥムブルンで過ごし、道次第、ルーイーパ流の『チャクラサンヴァラ・タントラ』の成就法と母タントラの究竟次第などの詳しい講義を行った。(4365-4a1. 和訳・一〇五)

子年(一四〇八年)の一二月下旬にラサへ出発し、大晦日の日に大祈願会への参加を呼びかける告知儀礼を行った。八千人を超える僧が集まり、法会の始まりを告げる宴を行った。(44b2-4. 和訳・一〇六)

〈二五〉五三歳 丑年 (一四〇九年)

丑年一月一日から一五日まで、ラサで大祈願会を開催した。(44b4-48a4. 和訳・一〇六―一〇七)

春の前半はセラチュエーディンに滞在し、六百人以上の三蔵僧たちに対して、『中論』、『瑜伽師地論』『菩薩地』の『菩薩戒章の大注』、『遍く良き成就法 (sgrub thabs kun bzang, Tsh. 2718)』、『道次第など顕教と密教の多くの法を講義した。(49a6. 和訳・一一四)

晩春、チェンガ・リンポチュエ・ソナムサンポ (sryan snga rin po che bsod nams bzang po) に招かれ、サンリのプチン (zangs ri phu mchin) に行つて、テルの比丘達に道次第などの多数の法を講義した。(49b1-2. 和訳・一一四)

一方、ダルマリンチェンと阿闍梨ドゥルジンパ (slob dpon dül 'dzin pa) を初めとする大半の僧はドク山 (brog ri bo che) に行き、ゲデン・ナンバルギェルウエーリン寺 (dge ldan nman par rgyal bai gling' ガンデン寺) を建たした。(49b2-6. 和訳・一一四)

夏安居は、ウルカのサムテンリン (Osam gran gling) で行い、ウルカとタクポ (dwags po) などの僧に対して多くの法を講義した。(4956-50a1, 和訳・一一五)

秋も、この地(ウルカ)で自利利他の活動を盛大に行った。(50a2-3, 和訳・一一五)

〈二六〉五四歳 寅年 (一四一〇年)

寅年(一四一〇年)二月五日にゲデン・ナンバルギエルウエーリン寺(ガンデン寺)に行った。そこで、道次第、『秘密集会タントラ』の注釈『灯作明』と五次第を講義し、『阿毘達磨集論』、『瑜伽師地論』などの解説と、量の難解で重要な箇所についてもたくさん講義を行った。また、『秘密集会タントラ』の釈タントラである『四天主請問』(の大注釈⁶⁶)と『智慧金剛集』の大部の注釈も著した。(50a3-5, 和訳・一一五)

〈二七〉五五歳 卯年 (一四一一年)

翌(一四一一年)卯年、『五次第を明らかにする灯明』、『五次第一座円満赤注』⁶⁹などを著した。(50a3-4, 和訳・一一五)

それから、五七歳までに寿命に係わる障害があるという徴があったので、その厄払いのために、五五歳卯年(一四一一年)の初冬から、師弟三〇人でヴァジュラバイラヴァ尊の『寿命を伸ばす修法』の幻輪を作り、厳しいお籠り修行に入った。(50a5-b3, 和訳・一一六)

〈二八〉五六歳 辰年 (一四一二年)

辰年(一四一二年)秋八月七日から、師弟三〇人で、昨年同様の厳しいお籠り修行に入った。(50a3-6, 和訳・一一六)

一月、少し体調を崩したが、瞑想修行を続けた。ダルマリンチェンを始めとする僧たちが、年の明けるまで延命儀式を続けた。⁽⁷⁰⁾ (50b6-51a3 和訳・一一七)

〈二九〉五七歳（一四一三年）

五七歳（一四一三年）のとき、病に伏したが、瞑想修行と延命儀式の力によって快癒した。(51a1-51b1; SNRN, 12a3 和訳・一一六～一一七；一九九～二〇二)

〈三〇〉五八歳 翌年（一四一四年）

その翌年（一四一四年）、タクパギエルツェン王に招かれ、オン (on) のタシドカ (Dkra shu do kha) で夏安居を行った。そこで、数百人の三蔵僧に中観、論理学、道次第など多くの法を講義した。

それから、再びガンデン寺に戻り、『チャクラサンヴァラ・タントラ』のルーイーパ流の大注釈書、⁽⁷¹⁾ 究竟次第の四座の瑜伽の大小の手引きと成就法、⁽⁷²⁾ 『秘密集会タントラ』の根本タントラとその注釈書である『灯作明』の校正を行い、⁽⁷³⁾ 語義を詳説する割注と、⁽⁷⁴⁾ 各章ごとの難解な箇所と全体を通じての難解な箇所の解釈を決定する確定的分析 (mtha' dpyod) 、⁽⁷⁵⁾ 項目ごとにもまとめた綱要書⁽⁷⁶⁾などを著した。(51b2～52a1 和訳・一一八)

〈三一〉五九歳 末年（一四一五年）

末年（一四一五年）の夏、密教の修行堂 (sngags kyi sgrub mchod khang' ガンデン・ヤンパチェン) の基礎を置いて、⁽⁷⁷⁾ 建設の準備を初めた。⁽⁷⁸⁾ (52a2-4 和訳・一一九)

〈三二〉六二歳 酉年（二四一七年）

酉年（二四一七年）三月から建築学に通暁したものを招集して、密教の修行堂の仏像・仏殿などの建立に着手した。
(5244-5304, 和訳・一一九～一二二)

修行堂（ヤンパチェン）はその年のうちに完成し、落慶法要が行われた。(5304-5, 和訳・一二二)

〈三三〉六二歳 戌年（二四一八年）

戌年（二四一八年）、ガンデン寺において、『秘密集会タントラの注釈灯作明』とその割注、同タントラの釈タントラ、同タントラの五次第の大部の手引き、六支ヨーガの大部の手引き、『時輪タントラ』の大注釈書『無垢の光』の詳説、中観、論理学、『チャクラサンヴァラ・タントラ』、道次第などの法を、深く盛大に講義した。(5313, 和訳・一二二)

夏と秋に、仏殿の回廊の壁画が完成した。『入中論釈・密意解明』⁽⁷⁸⁾の執筆も終えた。(5334, 和訳・一二二～一二三)
年の終わりに『秘密集会タントラ』の根本タントラとその注釈書『灯作明』の開板の準備に着手し、翌年完成した。
(5424, 和訳・一二二)

〈三四〉六三歳 亥年（二四一九年）⁽⁷⁹⁾

亥年（二四一九年）の春と夏の間、三蔵僧に『チャクラサンヴァラ・タントラ』の根本タントラなどの無量の法を講義し、『チャクラサンヴァラ・タントラ』の根本タントラの複注⁽⁸⁰⁾も完成した。(5455, 和訳・一二二)

亥年の秋、最後の教化の旅に出た。ガンデン寺を発ち、ラサのジョー釈迦牟尼像を礼拝し、トゥールンで所化を教化した。次にデペン寺に行き、多くの僧に、道次第の手引き、ナーローの六法、『入中論』、『秘密集会タントラ』な

どの法を説いた。デブン寺を発つてラサに戻り、ジョー釈迦牟尼像を礼拝し、セラチューデインに行った。そこに密教経典を教授する学堂を建てさせた。次にパラムのデチェンツェ (bde chen tse) に行つて、そこにガクカル (ngags mkhar) という密教の学堂を建てさせ、落慶法要をした。それからタクカル、ドゥシ (gru bzhi) に行き、ふたたびガンデン寺に戻つてヤンパチェン修行堂に入った。全僧出席の茶会において、『極樂に生まれるための祈願文』を作つた。そして自らの居殿に戻り座に着いてから、体が弱つていき、瞑想の中、死のプロセスを辿つていった (622-652 和訳・二二六―一四二)

四、残された課題

本稿では、ツォンカパの在世時に書かれた同時代資料である伝記、ケードウプジェ著『信仰入門』の記述を基に、ほぼ編年体でツォンカパの生涯の事績の年時を確定しないしは推定してきた。ツォンカパは、二年ほど同じ箇所滞在することはあるが、それ以外の箇所では、毎年、さらには年に二、三回、季節の変わり目に場所を移動している。『信仰入門』では、それが忠実に記録されている。ただし、年次ないしは年齢が明示される箇所は一五ヶ所ほどであり、それ以外は、四季節が示されるのみである。そのため、年の経過は、前後の季節の言及から推定することになる。この『信仰入門』以外にも短い伝記や一つのエピソードを述べた短い著作はあるが、それらは個々の事績の内容に付加するものはあつても、時間軸の決定にはほとんど寄与しない。本稿では、年時と場所および関連する人物を中心に記載した。本稿で整理した時間軸は、それ以外の情報を付加してツォンカパの事績をより深く理解するための土台になるであろう。

例えば、ツォンカパはコロフォンで執筆年時に言及することはないが、本稿で指摘した時間軸と執筆場所や関連する人物などの情報を勘案すれば、より多くの著作の著作年を推定することができるであろう。さらに書簡や特定の人

に当てた讃嘆偈などから歴史的な情報を抽出できる可能性もある。これらは次の研究テーマとなる。

ツォンカパの伝記の研究として、本稿とは別の視点でツォンカパの思想的展開過程を辿ることもできる。たとえば、福田(二〇一八)で示された聖文殊の啓示による中観思想の形成過程の考察や、ラムリム思想の形成過程における聖文殊と『教説次第大論』とアティシャからのラムリムの伝承の役割、レンダワの著作との関係、夢やヴィジョンの分析によるツォンカパの密教思想の形成過程の考察など、本稿で全く触れていないが、他の伝記的資料を比較考察することによって、ツォンカパの思想的な展開過程を明らかにすることもできるであろう。

ツォンカパのように、中世の人物の年次ごとの細かい事績や思想展開の様子が詳細に明らかにできる例は稀なことであり、しかもそれがツォンカパのような傑出した人物について可能であるということは、極めて幸運なことである。

文献表

- D]G 『信仰入門』 *thams cad mthayen pa blo bzang grags pa'i dpal gyi zhal snga nus kyi rnam par thar pa yongs su bryod pa'i gnam du bya ba dad pa'i 'yag ngogs / mkhas grub rje dge legs dpal bzang po*. In *rje tsong kha pa'i gsung 'bum*, zhol par ma. ka. Toh. 5279.
- KRTB 『小品集』 *bka' 'bum thor bu / tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsum 'bum*, zhol par ma. kha. Toh. 5275.
- KDCM 『カダム仏教史：明灯』 *bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me / kun dga' rgyal mtshan*. BDR. W23748. 340b-356b. 西藏人民出版社，二〇〇三年。
- [LD] 『ロタクドゥプチェンとお会いになった様子』 *lho brag grub chen dang mjal tshul / lho brag nam mkha' rgyal mtshan. gsung 'bum*, zhol par ma. ka. Toh. 5264.
- NTDG 『宗隆巴]大師伝』 *rje tsong kha pa chen po'i rnam thar chen mo / cha har dge bshes blo bzang tshul khrims*. 中国藏学出版社，二〇〇六年。
- NTLK 『ツォンカパ伝補遺』 *tsong kha pa'i rnam thar chen mo'i zur 'debs rnam thar legs tshad kun 'dus / rtoqs ldan 'jams*

dpal rgya mtsho. gsung 'bum. zhol par ma. ka. Toh. 5260.

[NTZ] 『宗喀巴大師伝』 *tsong kha pa chen po 'i man thar / rgyal dbang chos rje blo bzang 'phrin las man rgyal*. 西藏人民出版社，二〇〇九年。

[SHDZ] 『藏文典籍目錄』 *bod gangs can gyi grub mtha' nis med kyi mkhas dbang brya dang bryud cu lag gi gsung 'bum so 'i dkar chag phyogs gcig tu bsrags pa shes bya 'i gter mdzod*. 人民出版社，一九八九年。

[SNRN] 『秘密の伝記』 *rje rin po che'i gsang bai man thar rgya mtsho lha bu las cha shas nyung ngu zhig yongs su bried pa'i gran rin po che'i snye ma / mkhas grub rje dge legs dpal bzang po. tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal gsung 'bum. zhol par ma. ka. Toh. 5261.*

[Toh] 『西藏大蔵経目錄 東北帝国大学蔵版』 *A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons Bkai-hgyur and Bstan-hgyur*. Ed. H. Uli, M. Suzuki, Y. Kanakura, T. Tada. 東北帝国大学法文学部，一九三四～五。

[Kaschewsky, Rudolf. (1971) *Das Leben des lamaisischen Heiligen Tsongkhapa blo-zañ-grags-pa (1357-1419) : dargestellt und erläutert anhand seiner Vita "Quellort allen Glücks,"* (Asiatische Forschungen : Monographienreihe zur Geschichte, Kultur und Sprache der Völker Ost- und Zentralasiens 32, 1-2) 2 vols. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

王森 (一九九七) 『西藏佛教發展史略』 中国社会科学出版社。

石濱裕美子、福田洋一 (二〇〇八) 『聖ツォンカバ伝』 大東出版社。

福田洋一 (二〇一八) 『ツォンカバ中観思想の研究』 大東出版社。

註

(1) 本稿におけるチベット文字転写の方法は、ほぼ Buddhist Digital Resource Center (<https://bdr.org>) の表記法に準じた拡張ワイリー方式を踏襲している。ただし、長母音に関しては A などの大文字を使用せず、チベット文字の表記通り B などのアチユンを使って転写している。

(2) ツォンカバが一三九二年三十六歳のとき、遁世修行のためにウルカに行ったときに同行した八人の弟子のうちの一人である。29

(3) 『信仰入門』は、『聖ツォンカバ伝』で用いられている訳。jug ngogs は、「渡し場」や「入り口の門」の意味であるので、dad pai jug ngogs を「信仰への入り口」「信仰へと導くもの」という意味であるが、意識である『信仰入門』が日本語の通りもよく、分かりやすいので本稿でもこの訳を踏襲する。

(4) ケードウプジェの『信仰入門』をトクデンパは『大伝 (riam thar chen mo)』と呼んでいる。現在「大伝」と言うと、ロサン・ツルティムの著した伝記カロサン・ティンレー・ナムギェルの著した伝記を指すことが多いので、注意が必要である。

(5) 『聖ツォンカバ伝』には、このトクデンパの秘密の伝記の補遺は収録されていない。この『秘中の秘なる御事績』には二の『善説拾遺』よりも、さらに多くの神秘的なエピソードが記されている。一方、『聖ツォンカバ伝』には、ツォンカバ全集の『小品集』に収録されている自伝『私の業績の要説 (yang gi rogs pa bryod pa ndo ksun du tsheed pa, Toh. 5275-58)』が訳出されている。これはツォンカバが晩年に自らの生涯を修学期、教学の確立期、仏教の布教期の三つに分けて略述したものであり、rogs bryod ndun legs ma という略称のもと、現在でもゲルク派の僧院で広く読誦されている。しかし、これはツォンカバが仏教を学んでいく過程を述べたものであり、活動の記録ではないので、年次の情報量は少ない。

(6) 『善説拾遺』の中で唯一年次が書かれているのは、ツォンカバの誕生が一二五七年であったことである (NTLK, 2a-6)。後に述べるように、ケードウプジェの『信仰入門』には生年の記述はないが、亡くなった年と年齢が記載されているので、そこから逆算して生年が一二五七年であったことが確定でき、『善説拾遺』の記述と一致する。

(7) 『藏文典籍目録』(中巻)によると、チャハルゲシエ・ロサン・ツルティムはモンゴル人であり、小さい頃に出家して、モンゴル語とチベット語を学んだ。二三歳のとき、北京の雍和宮へ行つてアキャ・ロサン・テンベ・ギェルツェンなどの下で仏典を学び、七一歳のときに亡くなった (SHDZ, 19-21)。

(8) ロダク・ドゥプチェン・ナムカ・ギェルツェン (lho brag grub chen nam mkha' rgyal mtshan, 一三二六―一四〇一) あるいはロダク・ケンチェン・チャクドルワ (lho brag mkhan chen phyag rdor ba) は、ロダク地方のダオ (dra bo) 寺の僧院長である。この著作はナムカ・ギェルツェンがツォンカバと邂逅したときに起こった様々な神秘的出来事を記したものである。その中で、彼は七〇歳 (一二九五年) の六月四日に、ツォンカバをロダクのダオ寺に招いたと記している (LDJ, 24-25)。しかし、『信仰入門』によると、ツォンカバがロダクに行ったのは、一二九四年の夏である。

- (9) 内容は予言や諸仏、諸菩薩などがヴィジョンの中に顕れる様子を記述したものであるが、著者は不明である。ケードゥブジェは三人称で記されている。
- (10) ただし全訳ではなく、章によっては要約のみになっている。
- (11) 木版本もあるが、稀覯本であり、通常はインドのサールナートで一九六七年にタイプ版で出版されたもの、あるいは中国の青海民族出版社で一九八一年に出版された活字本が広く一般に読まれている。
- (12) 彼は、他にダライ・ラマ一〇世 (*tshul khrius rgyal mtsho*, 一八一六～一八三六) と一一世 (*mkhas grub rgyal mtsho*, 一八三八～一八五五) の伝記も著している。
- (13) ただし、そこには上述のロサン・ツルティムの伝記は言及されていない。
- (14) チベットの歴史書での年齢記述は数え年である。たとえば、ツォンカバは甲年（一三九二年）に三六歳であったと記されているが、生年の一三五七年から計算すると、一三九二年は数え年三六歳であることが確認できる。以下、本稿での年齢も、数え年で記載する。
- (15) フォーリオ数、行数はシヨル版『信仰入門』(D)G)のもの、和訳は『聖ツォンカバ伝』のページ数であるが、本稿ではこの対で典拠を示すことが多いので、以下書名の略号は省略する。
- (16) トンドゥブ・リンチェンはツォンカバ幼少期の恩師であり、出家戒も彼が授けた。『信仰入門』には「トンドゥブ・リンチェンの伝記」が記載されている (6b1-7b5, 和訳・三二一～三二五)。
- (17) 原語は “*phar phyin*” なので、正確には「波羅蜜〔思想〕」と訳すべきだが、これは『般若経』の注釈である『現観莊嚴論』に説かれる思想であり、通例に従って「般若思想」と訳す。
- (18) ロサン・ツルティムは、ツォンカバが一九歳のときに、ニヤオン・クンガペルの紹介を受け、前にも面識のあったレンダワのところで『阿毘達磨俱舍論』とその自注を聴聞したと述べているが (NTDg. 56-59)、本文で述べたように、ツェチェン寺に行ったのは二〇歳の夏と考えられる。これは、ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカバ大伝』に「二〇歳の辰年の夏学期にツェチェンにいらっしやり […] 聖レンダワはその夏はサキヤからツェチェンにいらっしやっているので、ツォンカバはレンダワから」『阿毘達磨俱舍論』の自注を聴聞する。(dguṅg lo nyi shu pa me brug lo'i dbyar chos la *rtse chen du phebs nas [...] rje btsun red mda' ba dbyar de sa skya nas rtse chen na phebas 'dug pa la mngon pa mdzod*

rang, grel gyi steng nas mdzub khrid du gsan)」と述べている(NTZJ, 82-83)。

(19) サキヤ派の学僧。ツォンカパとそれほど歳が離れていないが、顕教における最も重要な師であり、『菩提道次第大論』までのツォンカパの初期の思想形成期に行動を共にすることが多かった。

(20) ロサン・ツルティムは、ツォンカパ二〇歳のときに、キョルモルン寺の僧院長であるカシパ・ロセル (dkar' bzhi pa blo gsal) のところに行ったと記している (NTDG, 617)。そのため一九歳から三〇歳までのロサン・ツルティムの年次の記述は、本稿とは一年ずつずれる。ロサン・ティンレー・ナムギェルは、ここで二一歳と明示していないが、本稿の(三)と同様「二歳の春にナルタンを通じて、サキヤ寺に行った」と述べているので (NTZJ, 89)、本稿と同じ推定である。

(21) 'de rig, としか述べられていないが、この直前の記述が「冬」であり、この後に季節が言及されるのも「冬」であり、時の経過は、この「その後」しかないので、この間に年が変わったと推定される。

(22) サキヤパンデイタの弟子ウユクパ ('u yug pa rig pai seng+ge / bsod nams seng+ge, ~ (二五三)) の著した『プラーマーナ・ヴァールツティカ』の注釈書。

(23) 次の(六)の記述が夏学期から始まるので、エ、ナルタン、デワチェン、サキヤでの聴聞や問答は、二四歳一三八〇年の秋学期から翌年の春学期にかけての出来事であったと推定される。

(24) 中観、論理学、阿毘達磨、般若思想、律の基本典籍。

(25) 以下、ツォンカパの具足戒受戒の次第が述べられるが、この重要な出来事について明確な年次の記述が見られない。直前の時期は、一三八一年の夏季にグンタン寺、サンブ寺、ツェタン寺を訪問したことが記されており、ツェタン寺での議論を終えたのち、ヤルルンのナムギェル寺でそれから年次を超えた季節の記述がないので、おそらく同年の後半に具足戒を受けたものと思われる。

(26) シャーキヤシユリーバドラはインドのヴィクラマシラ大僧院の最後の僧院長である。同僧院が一二〇三年イスラム勢力に破壊されてインドでの仏教の拠点が失われた。シャーキヤシユリーバドラはその前年にチベットに亡命し、サキヤ派のサキヤパンデイタ・クンガギェルツェン (一一八二〜一二五一) に出家戒を授け、またインド仏教最後の伝統、特に論理学の伝統を伝えた。

(27) 具足戒を受けた後、デイグン・カギユ派の本山テルに行ったのが、同年(二五歳一三八一年)なのか翌年(二六歳一三八

二年)なのかは不明。さらにその後、三一歳一三八七年にデワチェンで『善説金蔓』を完成するまでの年次も確定することはできない。

(28) バクモドゥ・カギュー派の祖師であるバクモドゥバ・ドルジュギェルポ (phag mo gru pa rdo rje rgyal po. 1110-1170) によって建てられた寺院。

(29) バクモドゥバ政権の第三代目の摂政であり、バクモドゥ・カギュー派第十代目座主。ツォンカパが書いた伝記はツォンカパ全集のkha巻に収録されている。

(30) ツァコポンはツォンカパの最初の四人の弟子の中の一人である。彼の生没年は不明であるが、ツォンカパは彼に三通の書簡を送っている。一通目の書簡の奥書に「ギャモロン (gya mo rong) で寺院を建つ終わつた」(KBTB, 193b4-5)と書かれているので、彼がギャモロンで寺院を建てたことが分かる。二通目は『道の根本三要素 (lam gyi rso bo nman gsum)』として有名な教誡の偈であり、三通目は『菩提道次第大論』の内容の説明である (KBTB, 194b5-196a3)。

(31) *shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstun beas mngon par rtags pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa legs bshad gser phreng*, Toh. 5412.

(32) 『現観莊嚴論』の注釈『善説金蔓』の奥書に「大僧院デワチェンにおいて、ラプチュン (rab byung) の年の五月 (snon gyi zla ba) に結びを完成した (chos grwa chen po bde ba can du rab byung gi lo snon gyi zla ba la mjug yongs su rdzogs)」とある。チベット暦の六〇年周期であるラプチュンは、一〇二七年 (丁卯の年) から始まる。「ラプチュン」とのみ言う場合は六〇年ごとの丁卯の年を指す。ツォンカパ存命中の丁卯の年は一三八七年である。したがって、デワチェンでの『善説金蔓』の完成は、三一歳の一三八七年五月であり、この春学期も同年であると推定される。ただし、『善説金蔓』の完成年あるいは執筆期間については諸説ある。ロサン・ティンレー・ナムギェルはツォンカパが三二歳のとき、『現観莊嚴論』の注釈書『善説金蔓』を著したと述べている (NTZJ, 108)。王森氏も、三三歳のときに『現観莊嚴論』の注釈書を著したとする (王森, 一九九七, 三三三)。ロサン・ツルティムの伝記では、二五歳から二九歳の間のこととして、著作年を特定していない (NTDG, 八四)。上述したように、完成年については、三一歳一三八七年と考えられるが、書き始めたツェルでの滞在が、二五歳一三八一年なのか二六歳一三八二年なのかは確定できない。

(33) “sar yang de'i phyi de / dbyar chos.”の直前の季節の言及は、春学期にチャユルで講義を行ったときである。「その

次」が次の年なのか、次の学期であるのかは微妙だが、次の年であるとする積極的な理由はないので、ここでは「春学期の次の学期、すなわち夏学期」と考えておく。これは、デワチエンで『現観莊嚴論』の注釈『善説金蔓』を完成させたという直前の記述とも合致する。

(34) 「弥勒の五法」のうち、『大乘莊嚴經論』を除く『中辺分別論』、『法法性分別論』、『現観莊嚴論』、『究竟一乘宝性論』の四書。

(35) 中観六論書のうち、『ラトナーヴァリー』を除く『中論』、『廻諍論』、『空七十論』、『六十頌如理論』、『広破論』の五書。

(36) ニグマの六法やナーローの六法に含まれる修行法で、臍下のトゥンモの位置に意識を集中してルンを動かす瞑想。

(37) ツォンカバとラマ・ウマバとの関係については、福田(二〇一八)第二章「聖文殊の教識による中観思想の形成過程」第一節「ツォンカバとラマ・ウマバの関係」(八五〜八七)参照。

(38) 次の段落で、秋学期前にレンダワとツォンカバはパウバニエルに行っている、この段落は夏学期のことと推定される。
(39) 生没年不明。著作も多くない。プトンの系統を引くシャル寺の尊者で、ツォンカバに多くの密教の法を伝えている。初めに会う前にツォンカバは彼の夢を見たのである。

(40) ロサン・ティンレー・ナムギエルの『ツォンカバ大伝』では、ツォンカバは三九歳のときにロダクに行つたと書かれている(NTD, 一四三)。王森氏もそれにしたっている(王森、一九九七、三二九)。しかし、『信仰入門』では申年(一三九二年)の冬の一〇月に三六歳の記述があり、それからロダクに行くまでの季節は、春、夏、冬、春である。すなわち、一三九三年三七歳の春、夏、冬と一三九四年三八歳の春である。したがって一三九四年三八歳の夏の後半にロダクに行つたと考えられる。ロサン・ツルタイムの『ツォンカバ大伝』でもツォンカバ三八歳のときにロダク・ナムカ・ギエルツェンと会つたと述べている(NTDG, 139)。

(41) ロダク・ナムカ・ギエルツェンが著したものに“lug zla'i tshes bzhi nyin lho brag bra bo dgon par phyag phebs byon pa bdag gis bsu ba la phyin pas” (六月四日にロダクのタオ寺にいらしゃったので、私は出迎に行つた)と書かれているのべ、タオ寺に行つたのが「夏」であることが分かる(LD, 2a1)。

(42) 一三九四年の夏以降、ロダクに七ヶ月滞在したとあるので、ロダクからジンチに行つたのは、同年の冬である。ジンチからニエルのロロに移つた季節は書かれていないが、そこに五ヶ月滞在したのち、夏は下ニエルのヤルデン寺で過ごしたとあ

るので、ニエルの口口には一三九四年三八歳の冬のうちに移動していると考えられる。

- (43) ドルンパ・ロドウージュンネー (gro lung pa blo gros 'byung gnas' 一一世紀～一二世紀前半) のこと。サンブ寺を創建したゴク・レクペーシェーラプ (アティシャの弟子の一人) の甥で有名な翻訳師であったゴク・ロデンシェーラプ (一〇五九～一一〇九) の弟子。

- (44) ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカバ大伝』では、四〇歳のときに下ニエルのセルジェガンのヤルデン寺に行つたと述べられている (NTZJ, 一五二)。しかし、『信仰入門』の記述から、上の注で指摘したような滞在期間になるので、この夏は三九歳一三九五年の夏を指していると考えられる。

- (45) ロサン・ツルティムの『ツォンカバ大伝』では 'de nas smad seng ge rdzong du phebs/dgung lo bzhi beui me byi lo'i dpyid gnas der bzhugs /' (それから、下ニエル地方のセンゲンにいらっしやつた。四〇歳である火鼠年の春はそこに滞在した) と述べられているので (NTDG, 一四九)、次に明確な年時が言及される子年 (一四〇八年) 五二歳のときの記述まで、本稿の推定と一年ずれている。ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカバ大伝』は三九歳とあつて、本稿と同じである (NTZJ, 二六八)。

- (46) このブツダパーリタのヴィジョンは、『秘密の伝記』では夢となっている。この夢については、福田 (二〇一八) 第二章「聖文殊の教誡による中観思想の形成過程」第二節「伝記資料に基づく聖文殊との問答」(七)「ブツダパーリタの夢」参照。
- (47) *ston pa la shes nas dad pa thob pa'i shugs kyiis drangs pa zab mo rten cing 'brel par 'byung ba gsung ba'i sgo nas bstod pa legs bar bshad pa'i snying po*, Toh. 5275-15.

- (48) 『縁起讚』の執筆時期や内容については、福田同上書、第二章第五節「『縁起讚』における『中観派の不共の勝法』」参照。
- (49) 「夏」は師弟二人がラデンの隠棲所の名声を聴いた時期を示している。そこに移動したのが夏のうちなのか、次の秋なのかは明記されていないが、「ラデン寺に出発した」というところまで一文で記されているので、おそらく夏のうちに移動したのであろう。

- (50) これは『信仰入門』で確認される限りでは、ツォンカパがレンダワに会った最後である。

- (51) *lam rim chen mo*, Toh. 5392.

- (52) ロサン・ティンレー・ナムギェルとロサン・ツルティムの『ツォンカバ伝』では、ツォンカパは四六歳のとき「菩提道次

『第八論』を書いたとされる。『信仰入門』では、四五歳秋から四六歳春までタクセンゲの隠棲所に滞在し、その間に『菩提道次第大論』、菩薩戒章・根本堕罪・師に関する五十頌の注釈書を執筆したと見られるので、『菩提道次第大論』はその期間の前半のことと思われるが、それが四五歳であるか四六歳であるかは特定できない。

- (53) *byang chub sems dpa'i tshul khriims kyi rnam bshad byang chub gzhung lam*, Toh. 5271.
- (54) *gsang sngags kyi tshul khriims kyi rnam bshad dngos grub kyi snye ma*, Toh. 5270.
- (55) *bla ma lnga bcu pa'i rnam bshad slob ma'i re ba kun skong*, Toh. 5269.
- (56) *rnam gzhag rim pa'i rnam bshad dpal gsang ba 'dus pa'i gnad kyi don gsal ba*, Toh. 5290.
- (57) *rgyal ba khnyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rin pa gsang ba kun gyi gnad rnam par phyee ba*, Toh. 5281. ロサン・ツルティムの『ツォンカバ大伝』でも、ツォンカバは四九歳のときに、『真言道次第大論』を著したと述べている (NTDg. 210-211)。『信仰入門』では、チャンパリン寺に四七歳秋から四九歳秋まで滞在し、その間に『真言道次第大論』を書いたと考えられる。この間に他にも密教の重要な著作が数点著されている。
- (58) *yigs byed kyi sgrub thabs bdud las rnam rgyal*, Toh. 5337.
- (59) *dpal rdo rje 'yigs byed kyi phrin las bzhi'i sbyin sreg dngos grub kyi rgya mtsho*, Toh. 5347.
- (60) 後の3b45に二年滞在したことが記される。五一歳一四〇八年の夏安居までなので、ここはその二年前の五〇歳一四〇六年の夏安居である。この箇所の『信仰入門』の記述は、最初に『了義未了義の区別・善説心髓』と『中論注・正理大海』の執筆の経緯、永楽帝からの招聘とそれの辞退の事情、講義内容の順に、時間の経過に沿うように書かれているが、永楽帝への返信が一四〇八年六月だとすると、多数の講義と夏安居が重なってしまうので、おそらく執筆と講義がほぼ一年ずつ行われ、永楽帝の招聘と辞退との時間の前後関係はないと思われる。
- (61) *drang ba dang nges pa'i don rnam par phyee ba'i bstan bcos legs bshad snying po*, Toh. 5396.
- (62) *dbu ma risa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho*, Toh. 5401.
- (63) 『了義・未了義の区別』と『正理大海』が著された時期は、この『信仰入門』の記述によれば、五〇歳一四〇六年の夏から五二歳一四〇八年の夏までの間ということであり、それ以上の正確な時期は特定できない。
- (64) ツォンカバは永楽帝への書簡に子年（一四〇八年）六月一九日と書いている (KBTB. 270a6-b1)。

- (65) この夏安居は、直後に「夏安居の終わりにキメーのドゥムブルンに向かった」とあるので、五二歳一四〇八年の夏安居だと思われる。
- (66) *dpal gsang ba 'dus pa'i bshad rgyud lha mo bzhis zhus kyi rgya cher bshad pa srog rtsol gyi de kho na nyid gsal ba*, Toh. 5285.
- (67) *dpal gsang ba 'dus pa'i bshad pa'i rgyud ye shes rdo rje kun las btus pa'i Tshka*, Toh. 5286.
- (68) *rgyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i man ngag rim pa lnga rab tu gsal ba'i sgron me*, Toh. 5302.
- (69) *rgyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i rdzogs rim rim lnga gdan rdzogs kyi dmar khrid*, Toh. 5314.
- (70) 次の年の記述にあるように、『秘密の伝記』では五七歳一四一三年にツォンカパは病に伏し、快癒するのはその五七歳のうちである。それまで延命儀式とツォンカパの瞑想修行は続けられたと思われる。その次に時間の記述があるのは、翌年五八歳一四一四年の夏安居である。
- (71) *bcom ldan 'das dpal 'khor lo bde mchog gi mngon par rtogas p'i rgya cher bshad pa 'dad pa 'jo ba*, Toh. 5320.
- (72) *rnal 'byor gyi dbang phyug l'u i pa'i lugs kyi bde mchog rdzogs rim gyi rnam bshad dngos grub snye ma*, Toh. 5324. *bde mchog l'u i pa'i lugs kyi rdzogs rim rnal 'byor chen po'i khrid kyi rim pa mdor bsdas*, Toh. 5340.
- (73) *rnal 'byor gyi dbang phyug l'u i pa'i lugs kyi bcom ldan 'das 'khor lo sdom pa'i sgrub thabs bde chen gsal ba*, Toh. 5323.
- (74) *gsang 'dus rgya cher bshad pa sgron ma gsal ba'i tshig don ji bzhin 'byed pa'i mchan gyi yang 'gral*, Toh. 5282.
- (75) *gsang 'dus rgya cher bshad pa sgron ma gsal ba'i dka' gnas kyi mtha' dpyod rin po che'i myu gu*, Toh. 5284.
- (76) *rgyud thams cad kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i rtsa ba'i rgyud / sgron ma rab tu gsal bar byed pa'i rgya cher bshad pas 'chad pa'i sa bcad bsdas don*, Toh. 5283.
- (77) 『信仰入門』にはツォンカパ六〇歳一四一六年の記述はないが、後代の仏教史ではツォンカパは六〇歳のときに、弟子のジャムヤン・チュージェ (jam dbyangs chos rje bkra shis dpal ldan, 一三七九―一四四九) に指示して、デブン寺 (bras spungs) を建てさせたこと記されている (たごせは『カダム仏教史：明灯』KDCM, 743-744)。ロサン・ツルタイムの『ツォンカバ大伝』でも同様な記述が見られる (NTDG, 283)。
- (78) *bslan boos chen po dbu ma la 'jug pa'i rnam bshad dgeongs pa rvas gsal*, Toh. 5408.

(79) 『カダム仏教史・明灯』などの後代の歴史書では、この年に、ツォンカパの弟子であるチャムチェン・チュージェがセラ寺を建てたと記述されている (KDCM, 748)。ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』でも一四一九年にチャムチェン・チュージェがセラ寺を建てたことが書かれている (NTDG, 320)。

(80) *bde mchog bsduṣ pa'i rgyud kyi rgya cher bshad pa shas pa'i don kun gsal ba*, Toh. 5316.